

## 『ミュージアム・マネージメント』の新しい風に期待する！

日本ミュージアム・マネージメント学会顧問  
国立科学博物館長 坂元弘直



我が国はいま、政治、経済、文化などのあらゆる面で急激な変化にさらされており、しかもその変化の先行きもきわめて不透明であります。そのような時代背景の中で、人々は物質的豊かさもさることながら文化的精神的豊かさを求めるようになってきており、博物館に対する社会的期待はこれまでになく大きなものになってきています。

その一方で、博物館をとりまく経済情勢には厳しいものがあり、解決すべき問題が少なくありません。

こうした内外の情勢に対応し、時代を積極的にリードしていくために必要とされるのが、博物館自身の経営能力、運営能力であり、そのための実践的研究や人材育成に関する提案が内外から強く期待されています。

そのような時期に本学会が活動する意義はきわめて大きなものがあります。

この学会には学生、ボランティア、民間企業で働く人など様々な分野の人々が参加しております。それぞれの人々は経営者として、学芸員として、そして利用者としてなんらかのかたちで博物館にかかわりあっています。ミュージアム・マネージメントは抽象的な理論や観念ではなく、実践にいかされてこそはじめて意味をもつものですから、このような幅広い人々が多様な視点から議論することは重要なことだと考えます。そこに本学会の最大の強みがあると思われます。

もうすでに各部会ごとに研究会が開始されていることと聞いております。すでに参加された人も所属を固定しないで、できるだけ多くの部会に参加いただきたいと思います。まだ参加されていない人も誰にでも開かれた学会ですので、気おくれすることなく積極的に参加されることはと思います。そして、ミュージアムについて侃々諤々の議論を展開してもらいたいものです。

こういうかたちでつくりだされる多彩な人々のネットワークから新しい創造がうみだされ、これから のミュージアムの発展に貢献する斬新な提案がだされることと確信しています。

### C • O • N • T • E • N • T • S

■ 「ミュージアム・マネージメント」の新しい風に期待する！／日本ミュージアム・マネージメント学会顧問 国立科学博物館長・坂元弘直	1
■ ミュージアム文化研究部会 文化創造メディアとしてのミュージアムの展望／部会長・沖吉和祐	2
■ 制度問題研究部会 第1回研究部会報告／部会長・島津晴久 幹事・小川義和	4
■ 理論構築研究部会 当面の活動テーマほか／部会長・高安礼士	6
■ 事業戦略研究部会 第1回研究部会報告／幹事・山下治子ほか	8
■ ソフトサービス研究部会 第1回研究部会報告／幹事・重盛恭一	10
■ 投稿ご自由 侃々諤々／書評	12
■ 会員からのメッセージ	14
■ 研究部会の開催予定一覧 ■ INFORMATION ■ 編集後記	16

## ミュージアム文化研究部会

### 文化創造メディアとしてのミュージアムの展望

#### 1. 研究会の方向

科学技術の進歩、情報化・国際化の進展といった社会の変化は、私たちの生活に大きな影響を及ぼしている。(私たちの生活意識や様式の変化が、上記の様な社会を要請しているという面が大きいことにも留意する必要はあるが。)

そして、様々な資料を収集、整理、保存、研究し、展示その他の方法で、地域をはじめとする多くの人々に対し、情報や学習の機会を提供してきた「博物館」も、その役割、姿、運営手法などにも変化してきている。(変化を要請されている。)

従前の啓蒙主義的な経営から、来館者（利用者）とともに文化を創造するというパフォーマティヴなものへと向かう試みが各地で始まっている。

「ミュージアム文化」研究部会では、このようなトレンドを踏まえ、①ミュージアムからどの様な文化を創造・発信できるか（すべきか）、②地域（企業を含め）の文化（まち）づくりにどの様な貢献をしていくか（影響を及ぼすか）という視点から、参加会員の具体的な体験や展望を基本に、今後のミュージアム・マネジメントの方向の検討を進めている。

#### 2. 研究会の検討状況

現在、研究会では、次のような事例紹介と協議が行われている。

10月にオープンする湖の総合博物館『琵琶湖博物館』では、①未知の世界を知り、成長・発展する（深く考え広く調べる）、②魅力ある地域への入口（フィールドへの誘い）、③幅広い利活用と交流を大切にする（広く伝えて深くかかわる）博物館として、湖沼を中心とする調査研究を基礎に、博物館と利用者との相互のコミュニケーションを重視した（普及という視点から交流という視点に立った）運営が行われるはずである。

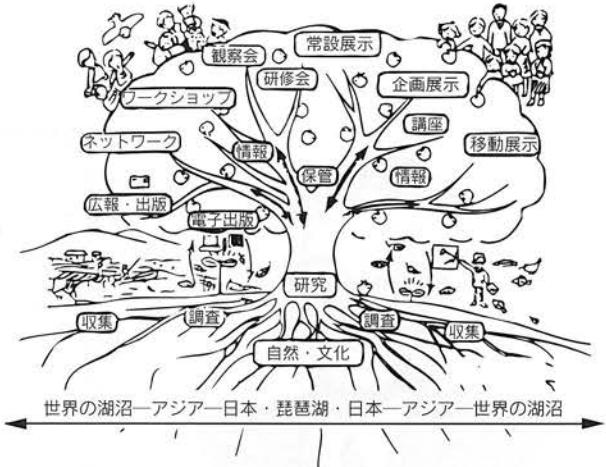
専門美術館においても、『啓蒙メディア』、『威信メディア』、そして、『文化広報メディア』としての美術館から、ポストモダンを超える『創造メディア』美術館へと転換する動きがある。こうしたなかで、百貨店はじめ企業の設立する美術館は商業主義的な面があつた一方で、美術館を「開かれたもの」、「気軽なもの」にし、さらに、参加型の創造活動を行う「時空間」を提供するという可能性に挑んだ功績は大きい。

芸術文化創造メディアとしての美術館の「創造」とその運営が課題として指摘される。

各地の自治体や企業の博物館の運営に当たって、特色のある資料の収集（来館者と一体になった資料づくり、資料集め）、資料整理や展示解説など、館の専門家（学芸員）と利用者の接点となるボランティアの活動、発信機能とともに幅広い受信機能の重要性、多様な利用者（「その気」来館者と「ついで」のお客さんなど）

のニーズに沿うための新メディアの活用など、様々な努力が行われている。

琵琶湖博物館の活動連関図



嘉田由紀子ほか

「(仮称)琵琶湖博物館の設置理念と運営計画」より

#### 3. 今後の課題

本研究会では、①いくつかの実践的な事例を中心としたケーススタディの中から、何らかの普遍性を見つける、②時代変化を念頭においたミュージアムに対する理念を、実際の経営に反映する試みを行う、といった両面から、ミュージアム文化を展望していきたいと考えている。

その際、従前からの博物館の機能に留意しつつ、次のような視点に立つ（当面は、博物館の立場から）こととしたい。

(1) 博物館活動に当たって、館の理念の下に、来館者（利用者）や地域住民との関係をどのように構築していくか。

その際、①創造活動を行うメディアとしての博物館、と②文化を創造する博物館が理念としてあり、それを支援する③AV機器やコンピューター、高度通信システムを効果的に利用できるインテリジェント・ミュージアム（リアル・ミュージアム）を考えることとなろう。

(2) まちの伝統の継承、芸術文化づくりや自然の保全といった地域的課題（まちづくり）に、博物館はどのように係わっていくか。

博物館は、それ自体単独で存在しえず、地域のなかの一施設である。そこで、①いかに存在意義を持てるかが問題である。また、②他の博物館や学校、図書館、さらに、情報の集散する駅、ショッピングセンター、郵便局、役場などとのネット

ワーク化（連携・協力）が必要になる。

- (3) 地域全体を博物館化（エコミュージアム構想）  
していくため、博物館の役割をどのように発揮できるか。

この場合、①地域に点在する博物館的な施設をどのようにネットワーク化するか、②地域に存在する全ての資源（文化資源、自然資源、人的資源など全ての資源）をいかにミュージアム化するかという考え方があろう。

すでに、このような試みを実践している市町村や、大学（ユニバーシティ・ミュージアム、キャンパス・ミュージアム）の状況の検証が必要であろう。

今日まで博物館が果たしてきた役割を十分に見直し、「博物館は生きている」、「博物館の不易と流行」を念頭に、21世紀のミュージアム文化について着実な検討を進めていきたい。また、他の研究部会の状況にも、注目していきたい。

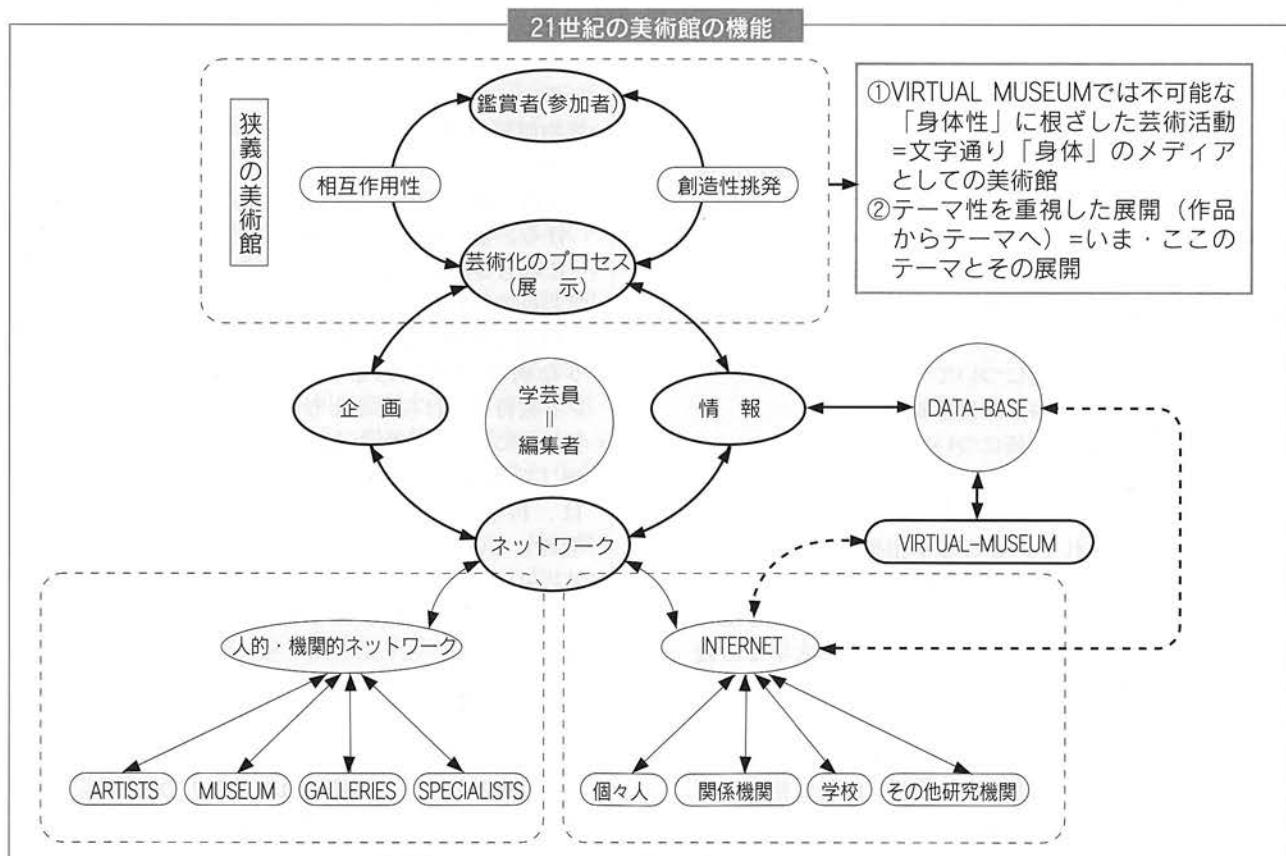
（部会長・沖吉和祐／北海道大学事務局長）

### 研究会開催状況

7月 7日 国立科学博物館

9月 16日 セゾン美術館

\*次回は1月頃に琵琶湖博物館で開催の予定



土井利彦 「21世紀のミュージアム文化に向けて」より

## 制度問題研究部会

### 第1回 研究部会報告

今年度第1回の制度問題研究部会は、部会長の島津晴久氏を座長に13名が参加し下記の通り開催された。

日時：平成8年6月29日（土）午後1時～5時

会場：国立科学博物館 中会議室

前回（第1回大会研究協議）の検討課題は以下の3点であった。

1. 博物館の制度の現状を把握してその中にある問題点を明らかにすること。
2. いろいろな方向からその問題点の解決の方策を考えること。
3. 問題点を克服した博物館制度の理想型を設定すること。

第1回研究部会では、前回の課題の1の博物館制度の現状把握、問題点に関連して、平成8年4月に出された生涯学習審議会社会教育分科審議会報告（「社会教育主事、学芸員及び司書の養成、研修などの改善方策について」）を取り上げた。この報告は、地域における生涯学習の一層の推進と社会の様々な変化への対応という視点から、社会教育主事、学芸員、及び図書館司書の一層の資質向上を図ることを基本的な考え方としてとりまとめられたものである。審議の中心となつた社会教育分科審議会の計画部会では、社会教育主事、学芸員、司書の3つの専門委員会が設置され、より専門的な検討が行われた。

はじめに、計画部会の学芸員専門委員会の委員であつたお茶の水女子大学教授の鷹野光行氏から、審議経過、検討状況等についての報告があつた。

鷹野氏の報告の趣旨は以下の4点であつた。

1. 学芸員の養成制度について
2. 学芸員の研修内容と研修体制の問題
3. 高度な専門性の評価について
4. 人事交流と有資格者の活用について

この中で特に生涯学習社会の中での学芸員という位置づけが明確に謳われていることが指摘された。また、1については、教育委員会などの実務経験や博物館における専門的事項を担当するボランティア経験を加味するなど学芸員受験資格要件の弾力化及び大学での養成過程の改善のこと。3については、専門性を評価する名称を付与する制度におけるその処遇、養成過程のこと。4については、学芸員有資格者を高度な博物館ボランティアとして活用を図る「学芸員有資格者データベース（人材バンク）」制度の創設のこと。等の報告がなされた。

鷹野氏の報告の後、各出席者から質疑、意見、提案等が出された。主なものは以下のとおりである。

#### 〈学芸員養成について〉

・大学卒業後の学芸員は専門性の面からは物足りないものがあり、すぐに一人前としてスタートできるものではない。

→今回の見直しの趣旨は博物館の良き理解者、博物館職員としてのビキナー、専門家になる可能性のある人材を育成することにあるようだ。

・地方の博物館としては、ビギナー養成ではなく、できあがつた人がほしい。その点で今回の養成課程の改善は不十分であった。

・大学における学芸員養成科目の改善はいつからか。

参考：大学における学芸員の養成科目の改訂はおもに、現行の10単位を12単位（博物館学4単位を「博物館概論」2単位、「博物館経営論」1単位、「博物館資料論」2単位、「博物館情報論」1単位）として充実を図るものである。

→来年度から実施予定

・大学で学芸員養成を専門に担当する教員が少ない。  
→国立大学の専任の教官は2人だけである。

・科目が改善されて各担当教員へ浸透できるのか。

→各科目のねらいが明示され、内容も明らかになつたので今までのような専門的教科を博物館学の科目に振り替えることはできなくなるだろう。

・博物館経営論という科目について奇異な感じを受けるが。

→経営＝効率というイメージがあり、奇異な感じを受ける。また教育普及活動をこの中に含めているが、これも専門委員会で議論の対象になった。

#### 〈学芸員の研修について〉

・博物館学専門の高等教育機関例えば博物館大学のような構想はないのか。特に実務経験者がリカレント教育を受けられるような施設がほしい。

#### 〈学芸員に対する高度な専門性の名称付与について〉

・理工学関係の学芸員が不足している。ある学会では、科学館で働く学芸員を科学技術専門員として登録している。

#### 〈学芸員の人事交流と有資格者の活用について〉

・地方の学芸員が県レベルを超えて人事交流できないか。

→県内の各自治体での交流が可能ではないか。  
教員のように県単位で採用ができるだろうか。

・学芸員有資格者データベース（人材バンク）の試みは今後どのように展開されるべきものなのか。

・年間6500人の有資格者が誕生し、1～2%の者のみが実際の学芸員の職に就くことができる。有資格者を博物館ボランティア等として活用することは、博物館の活性化につながり大いに歓迎されることだが、制度として問題解決にはなっていないのではないか。

- ・博物館法も含め全体的な制度の見直しが必要なのではないか。
- ・この報告書には博物館法に関する検討事項が含まれていない。
- ・専門委員会で博物館法自体を対象とした議論がされていなかつたのは残念であった。

博物館法を含めた全体的な制度の検討については、大きな問題であり、今後も引き続き研究を進めていくことが確認された。

また、都合により今回参加できなかつた玄武洞ミュージアムの田中榮一氏から、手紙にて本研究部会に対する提案があつたことが報告された。手紙の内容は以下の通りである。

#### (制度問題研究部会への手紙)

うつとうしい梅雨の候を迎えたが、皆様がたにはますます健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、この度日本ミュージアム・マネジメント学会の会報をご送付いただき、ぜひ6月29日開催の制度問題研究部会に出席していろいろご指導をいただきたいと考えておりますが、別の用事があつてどうしても出席することができませんので、お手紙を書くことといたしました。

私の博物館は、天然記念物玄武洞の所で玄武洞の成り立ちや歴史、玄武岩についての展示並びに世界の石の花・華である、宝石・鉱物の結晶・化石を集めた博物館です。

数年前の博物館館長会議において、博物館の育成や援助の方策として、現在日本の国においては財団法人という制度を設けている。この制度を活かして博物館の経営を行なうことがよい。という助言をいただきまして早く実現したいとこれまでにいろいろと努力を続けて参りました。現在博物館相当施設としての申請を致しており、その後財団の設立に取り組み、博物館としての認可が頂けるように進めたいと計画しております。

現在の日本では文化行政が遅れているので、博物館の運営は、株式会社のままの方がやりやすいのだという意見もありますが、私としては長期的に見てやはり私立の博物館は財団による運営にするべきだと考えております。制度の立場から見る時、現在の制度では私立博物館としては株式会社と財団法人とどちらで経営する方がいいのか、どんな問題点があるのかを検討してください。

・・・(中略)・・・

なお、次の点につきまして制度問題研究部会において『議題』として取り上げ進めていただくことができないでしょうか、提案をさせていただきます。

1.アメリカ博物館の辿つて来た歴史などを社会制度として調査研究し、新しい時代の要求に応えられる博

物館を育てるための提案ができるようにしてください。

2.都道府県における財団法人の認可の基準、並びに財団法人になつてある博物館の設立の過程を調査し、博物館の財団法人化と運営上の問題点や課題を明らかにしていくことをお願いします。

平成8年6月15日

玄武洞ミュージアム

館長 田 中 榮 一

本研究部会としては、こうした田中氏の提案を踏まえつつ、まずは現在の日本の博物館制度を相対的に捉えていくために、海外の博物館制度に関する知識を深めることが重要であり、海外の事情に詳しい関係者を招いて話を聞き、検討を加えることが望ましいとの提案があつた。

部会終了後、担当者で話し合った結果、次回はアメリカにおける博物館の歴史や制度について、若手の研究者に報告をしてもらい出席者全員でディスカッションを行うこととなった。

(部会長・島津晴久／(財)千葉県社会教育施設管理財団、幹事・小川義和／国立科学博物館)

#### 第2回 制度問題研究部会

日 時：平成8年10月12日（土）午後2時～5時

会 場：国立科学博物館

テーマ：アメリカにおける博物館の歴史や制度について（仮）

報告者：山本珠美（東京大学大学院教育学研究科在学）



## 理論構築研究部会

### 1. 理論構築研究部会について

我が国は現在、さまざまな面での転換期に直面している。人々の意識は物質的豊かさから文化的、精神的な豊かさへ、ライフサイクルも単線型から複線型へ、また教育システムも学校中心から生涯学習へと移行している。

現在、我が国における博物館をとりまく環境は大きく変わり、これまでの収蔵資料による博物館分類やそれに基づく活動計画にとらわれることなく、より幅広い視点からの博物館運営の意義と方策が求められている。このような変革期にあって、博物館の在り方は利用者の拡大に伴い、生涯学習社会、国際化社会、高齢化社会等への対応や新しい地域文化の創造の拠点として活動が期待されており、新しい時代に対応する博物館運営を行うことが必要なものとなっている。

また近年、設置者の立場からの運営改善ばかりでなく、利用者の視点から博物館運営を見直し、マーケティング等の経営学の考えを導入したより網羅的で科学的なマネージメントを行う試みがなされており、日本ミュージアム・マネジメント学会においても、その学術的基礎を構築することが望まれている。

すでに、欧米では法律、経営、心理学、マーケティング、マスコミュニケーションなど多岐にわたる内容を組み入れたミュージアム・マネジメントという研究領域があり、その成果は博物館の実践的マネジメントや人材育成などにいかされている。

この学会は、このような欧米の成功に学びつつ、博物館と産業界、関連学会、教育界などと緩やかなネットワーク作りを目指すとともに、社会的要請に対応したミュージアム・マネジメントを研究し、その成果を人々の生活文化の発展にいかしていくことを目的に発足させたものであり、その研究部会は、①ミュージアム文化研究部会②制度問題研究部会③理論構築研究部会④事業戦略研究部会⑤ソフトサービス研究部会で構成されている。

理論構築研究部会においては、他の研究部会の動向や成果を参考としながら、今日行われている博物館以外の図書館や学校、病院及びボランティア等のさまざまな非営利組織（NPO, NGO）の活動の事例からも学び、日本の社会に相応しい今日的な課題に応えることのできる博物館運営（ミュージアム・マネジメント）の理論的根拠等を構築しようというものである。

### 2. 当面の活動テーマ

平成8年度の研究テーマを【ミュージアム・マネジメントのパラダイム研究】とし、以下の分野についての研究協議会を実施する。

①さまざまな博物館運営の目標と形態の事例研究から、

博物館運営論の新たな視点を得る。

- ・キャンパス・ミュージアム……学習院大学、電通大歴史資料館、東京大学
- ・電子博物館(パー・チャル・ミュージアム)……科学技術情報振興事業団（仮）
- ・テーマ・パーク……東京ディズニーランド、ピューロランド、ハウステンボス
- ・企業博物館……トヨタ自動車博物館、産業技術記念館、横河電機技術博物館準備室

#### ②非営利組織の事業評価法

学校、病院、図書館等を始めとする学校法人、福祉事業団、その他さまざまな財団、社団の事業は一般に非営利組織の事業と称される。これらの組織が何を目指し、どのような手法によって自己診断を行い、より有効な事業運営をどう行うかを科学的に検証するきっかけとする。

・N P O活動の実践的研究者の指導により、自己診断法の実際を実習する。

#### ③ミュージアムと連携しながら活動を行おうとする各界の第一人者からのミュージアム・マネジメントに対するメッセージとその研究会を実施する。

展開の例；

- ・S T Sからの期待……科学と社会のかかわりを研究する学者
- ・学界からの期待……電気学会、化学史学会、機会工業会
- ・産業界からの期待……通産省工業技術院、科技庁
- ・展示設計者からの期待……展示設計事務所
- ・建築設計からの期待……博物館建築設計事務所
- ・ミュージアム・マネジメント学会員からの期待  
……理論構築研究部会への期待

### 3. ミュージアム・マネジメントのパラダイム検証

博物館に対する期待が大きく変化する中、現在博物館に求められる役割は必ずしも自明なことではない。今までどちらかと言えば、資料を持つ設置者側の論理で博物館を設置し、運営してきたのではないだろうか。

また、博物館の理念論がやや先行しすぎて、博物館の規模や設置者の違いにあまり注意を払わなかつた嫌いがある。むろん共通する項目も多いことは事実であるが、日本の現状では規模については3段階くらい、設置者についても国、地方公共団体1種・2種、財団、企業等の分類に応じた議論が必要であると考えられる。

そのような意味から、当面ミュージアム・マネジメントは資料や展示等に関する博物館本来の博物館事業論と人事管理論や人間関係論などの一般経営論に分け、日本におけるミュージアム・マネジメントの理論構成はどうあるべきかを研究する。

〈博物館基礎論〉

- ①社会における博物館の役割、「博物館の使命は何か」
- ②博物館をどう作るか「資源はどうあるべきか」
- ③博物館の情報提供「博物館の成果は何か」

〈経営論〉

- ④ミュージアム・マーケティング「利用者、顧客は誰か」
- ⑤事業構成と博物館機能「博物館事業とは何か」
- ⑥一般経営論「カスタマー・センターの必要性」
- ⑦財務財政論

〈技術論〉

- ⑧コミュニケーション技術論
- ⑨情報理論（ネットワーク理論、マルチメディア理論）
- ⑩科学計画法

〈特論〉

- ⑪調査分析法
- ⑫人事管理法
- ⑬色彩・音響・デザイン法

**研究実施プログラム**

(1) 短期的実施計画(平成8年度事業計画)

- ①9月28日 第1回研究会  
「新しいミュージアム・パラダイムを求めて」
- ②10月5日 第2回研究会  
講演・実習会  
「非営利組織における自己診断法について」  
(講師: 笹川財団プログラム・オフィサー  
田中弥生氏)
- ③2月中旬 第3回研究会  
事例発表「さまざまな博物館活動の形」

(2) 3か年計画

平成8年度/本研究部会が何を目指すかの  
調査・研究・協議  
平成9年度/研究会のテーマ選定と研究会の実施  
平成10年度/研究会のまとめ

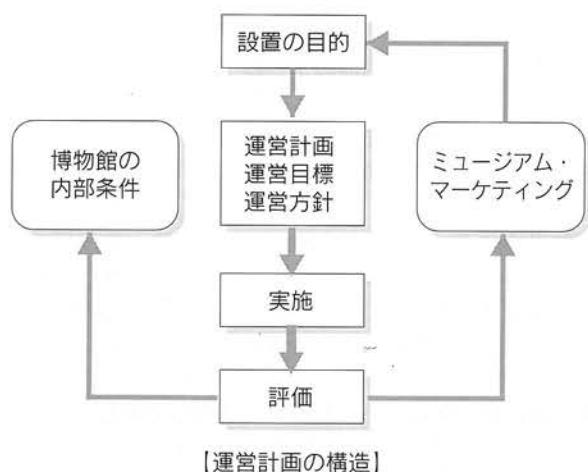
(3) 長期的実施計画

理論構築研究部会10か年活動計画を作成する。

4. 次回(10月4日)の講演・実習の位置づけ

博物館運営における評価法については、現状では単に入館者の多寡や展示物の使用状況だけをもって済ませている場合が多い。

そこで、本部会においては“評価”的位置づけるところを次の図のようにとりあえず理解し、もっと博物館運営全体を社会との関連で評価する方法を参加者自らが実証・検証しようとするものである。



そのような意味から、博物館の運営評価法を単なる博物館経営の成功不成功というものに限定せずに、非営利組織の活動をそれが属する社会との関係で評価する方法を検討したいと考えた。

論点として想定したいものは、

①非営利組織における自己評価の手法

～米国の事例から日本は何を学ぶべきか～

②非営利組織の経営全体における“評価”的位置づけ

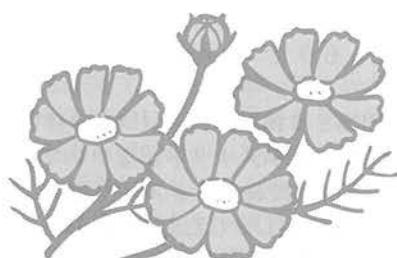
③非営利組織の活動としての博物館運営の特質

について

④自己評価と客観的評価法の違いとその運用について

などとしているが、広く日本と諸外国の非営利組織の運営の在り方についての検討も行いたい。

(部会長・高安礼士 / 千葉県立現代産業科学館)



## 事業戦略研究部会

### 三菱みなとみらい技術館のチームワークにうなづいた

7月6日土曜の午後。例会は、港を臨む横浜の「三菱みなとみらい技術館」で行われた。ミュージアムの事業戦略は、現場を「見て、聞いてから」という実践派的考えに基づいたのであった。当日は、首都圏のみならず遠方からも参加者があり総勢13名。まず、館内を説明受けながら見学、その後、質疑応答を含めた討議。ここでは、その内容をかいつまんでお伝えしたい。

#### ◆開館して1年後、パネルを2／3作り変えた。

三菱みなとみらい技術館は、三菱重工業（株）が未来に向けて子どもたちに科学技術に親しんでもほしいという願いからできたもので、平成6年6月に開館した。この計画は、バブル経済の真っ盛り、ちょうど大学生の理科離れが深刻な話題になつた頃に立てられたものだった。が、バブルは去つても、未来を見つめる当館はその使命とともに誕生した。

当館の特徴は、経営母体である三菱重工業で作つたり使つている「実物」が比較的たやすく手に入ることから、展示を「なるべく大きい実物志向」にしていることだ。ロケットのエンジン、ゴミ焼却プラントの断面模型などは教科書には説明として載つてあるものの、なかなか理解しにくいので人気のコーナーになっている。

オープン3年目を迎えた現在だが、1年目は展示が館の目的、すなわち「小学生や中学生に親しんでもらう」という点と食い違つて苦労が多かつたという。近藤館長は、

「たとえば、展示パネルを見て読んでも説明がまったくわからない、というものが非常に多かつた。専門用語が多く、一般的な言葉になつていなかつたり、英語表示がなかつたりでした。すつもんだした結果、翌7年に2／3を作り替えました。オープンの翌年にパネルのリニューアルとなつてしましました。これも、展示を作る人と運営する人の意識の統一がされていなかつたからでしょう」

と説明する。

#### ◆館内の案内スタッフも取り込んでマネジメントしていく

そうして、もう一つの試行錯誤が運営スタッフの体制だつた。

「当初は、現場と事務系のスタッフを分けていたのですが、これにはあまりメリットがないのではないかと、思い切つて案内・接遇スタッフと一緒に運営についても考えていくようにしました」（近藤館長）

つまり、入館者からの要望や質問、意見などをいち早く、直接的に受け应えられるのは、館内を案内したり説明する女性スタッフであつたわけだ。それをかつては、現場の雰囲気を知らないスタッフが組み立てて

いたので、お互いの領域で理解ができにくい状況にあつた。そこで組織的に改め、案内スタッフが入館料の計算、統計、ミュージアム・ショップの売り上げ管理、企画展にむけての勉強会、さらにきちんとしたマナーや言葉使いを要求される本社のVIP待遇のお客さまへの接遇もすべて案内スタッフとともにを行うようになつた。女性スタッフは関連会社の広告会社に所属し、接遇については2ヶ月間研修を受けるようになつてゐる。リーダーの栗林りえさんは、

「案内は自由に見ていただくことを基本にコミュニケーションのメディアになればよいと考えています。ただ、コンピューターの前では直接話すことが多いですね。その時に出た質問で私どもで答えられない場合は、後日、本社広報や技術者からの回答でお応えしています」

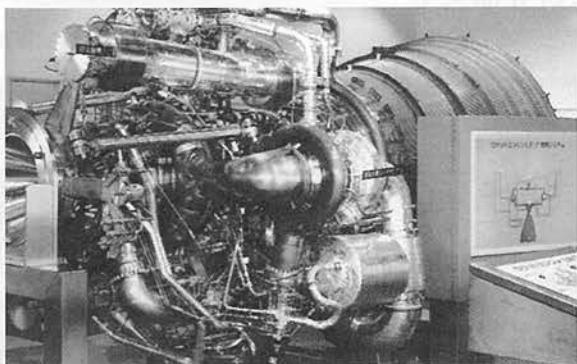
と話す。また、最近では多くの子どもたちに利用してもらいたいと地元西区役所との連携、遠足、社会見学、修学旅行などの利用に向けて「小中学校の先生や旅行代理店のへ対応も取り組んでいる。そういう簡単なチラシなども栗林さんらスタッフと一緒に作つていています。

「当館は売上げを上げるためにあるではありません。利用されることに意味があると思います。その意味で地域や学校への働きかけは大変重要と思っております。また、案内スタッフは、専門的知識よりも子どもたちと接することに抵抗のない教育系出身のような人がいいかもしれません。ただニコニコ笑っているだけではない、現場とマネジメントをつなげる能力が要求されます」（近藤館長）

オープンから3年。ミュージアムの目的をいかに整理し、そこから具体的な方法に落としていくか。三菱みなとみらい技術館の試行錯誤の真摯な歩みが、案内女性スタッフたちのにこやかでしかも静かな自信をたたえたようすに現れていた。

（幹事・山下治子／（株）ミュゼ）





- 名 称：「三菱みなとみらい技術館」
- 所在地：神奈川県横浜市西区みなとみらい3丁目3-1三菱重工横浜ビル
- 面 積：約4,000m<sup>2</sup>（展示面積2,800m<sup>2</sup>、支援施設840m<sup>2</sup>、共用施設310m<sup>2</sup>）
- 開 設：1994年6月1日

## まとめ

1. 三菱みなとみらい技術館の三菱重工という企業のなかでの位置づけ
  - (1) 子どもたちに科学技術の素晴らしさを伝えたい  
長期的な視野に立った科学技術と企業の普及活動。
  - (2) 三菱重工の広報機関
    - ・新入社員の研修の一環、VIPへの自社PR
2. 館としての評価の基準
  - ・学校の課外授業での利用状況が判断材料
  - ・年間来館数には評価の基準がないと認識
  - ・施設の規模からいって適正入場者数は一日に5~600人と判断
3. 運営スタッフと対外活動
  - ・男性2(館長、副館長)女性6人(うち教員免許保持者2名)
  - ・準備に携わったスタッフと運営スタッフが別々だったため、開館当初は混乱した。展示、特に解説文の文章が難解で不評のため、開館後1年もたたずに2/3入れ替え、書き直しの原稿は館長自ら作成。
  - ・運営形態も当初は現場の運営にあたる女性スタッフと館長たちの学芸・事務スタッフを別々にしていたが、館の一体感を重要視して統合。現場の声、専門外の視点を積極的に取り入れることとし、特別展の企画にも参加してもらっている。
  - ・展示に關係した出版物はなし、インターネットでの情報発信は検討中(9/6現在発信中)

(佐藤琴／宮城県文化財保護課)

## 参加者の声

三菱みなとみらい技術館は、企業のPR活動を含めた科学技術展示館である。ここでの展示は、企業の最先端技術をわかりやすく楽しくみてもらい、若い人たちに科学に対して興味をもってもらうことを目的としている。科学展示は、さわって調べ、確かめて試してみれるのが基本である。

●入館料：一般500円、中・高生300円、小学生200円、

団体(30名以上)は各100円引

●TEL：045-224-9031 FAX：045-224-9902

●概要

「三菱みなとみらい技術館は、科学技術が人類に福祉、生活の向上に貢献している姿を紹介する場として、三菱重工業が企画・設計・建設したものである。

館内は、環境、宇宙、海洋、エネルギー、歴史、及びデザイン＆シミュレーションの6つのゾーンで構成されており、ロケットや潜水艦、火力発電など、技術のしくみをわかりやすく伝える装置模型が多数展示されている。展示の目玉は、大型衛星打ち上げ用ロケットH-IIのメインエンジンの実物展示で、本物のロケットエンジンの迫力を間近に見ることができる。また、自分でヘリコプターを操縦する「スカイウォークアドベンチャー」、世界最高の深海潜水調査船しんかい6500の実物展示や、自分だけのオリジナルシップや、飛行機を設計できるCADコーナーもある。子どもたちはもちろん、若者向けの情報誌に紹介されることから、理科系の学生や社会人がカップルで訪れたり、大人同士の使われ方も多くなってきた。ミュージアムショップ、カフェもある。

この館の展示にも随所に基本が守られていて飽きのこない内容で楽しめるものであった。特に大型実物展示では、本物のH-IIロケットエンジンを手で触れたのは良い経験であった。また、スタッフの皆さん前向きな姿勢には、とても感銘を受けた次第である。

(建部賢太郎／(株)学習研究社・情報映像事業部)

館の規模は大きくても、少人数で運営されていることに感心した。しかも館長を初めとする館員の皆さんのが、相互に補完しあつていて、少人数の良さ、強さが伝わってきた。「事業は人なり」を実感した。

(大木明／(株)ブリヂストン秘書室)

博物館の運営は、その館がどのような条件下で何を目指しているのかが明確でないと構築できないと思う。当館では、その制約と目標が非常に明確であることが良い効果を生んでいる。館長もこれまで博物館運営などやったこともなく、また学芸員資格があるわけではないが、事業の目的やそのための方策を的確に捉え実行されていた。また、決して黒字にはならない企業の事業を続けるためには、その存在意義を社会一般だけでなく自社内にアピールすることも必要なだとおっしゃられていたことに企業博物館ならではのものを感じた。

(佐藤琴／宮城県文化財保護課)

## 部会長から

非営利事業を主とする文化施設一特に民間の企業が設置する文化施設においては、公共と比べ低レベルのものが多いくと思われるがちだが、実際には規模的にも人材的にも、また予算的にも勝るものが多いのが現状である。とくに、ホスピタリティ面ではそれが顕著であるが、一方バックヤード面の充実、例えば検査・研究等の学芸業務が比較的手薄になっている点は、サービス精神の発露が常に顧客にむけられている現実と重なるものがある。

(高橋信裕／文化環境研究所)

## ソフトサービス研究部会

### 第1回研究部会

「事例研究；ソフト・サービスの現場を聞く」

1996年7月13日 土曜日 15:00～17:00

国立科学博物館 特別会議室 参加人数；25人

ソフトサービス研究部会では、山梨県有数の観光地「清里」の萌木の村博物館 ホール・オブ・ホールズから高見沢清隆学芸課長をお招きして、同館の活動とサービスの実践について語つていただいた。

「清里」と聞けば、多くの方々は芸能人のショップや、まるで西洋のお城を模したような喫茶店などが立ち並ぶ“かの清里”を想像するだろうか？

清里は、本来、開拓の指導者、故ポール・ラッシュ博士と共に、ここに入植者たちの手により開拓された土地である。おいしいソフトクリームで有名な清泉寮も、博士の意志を継ぐ人々により経営されている。この博物館の経営母体「株式会社 萌木の村」も、現オーナーが、博士の志を受け継ぐため設立した共同体的な会社である。工房やホテル、飲食店舗など20の施設で構成されるこの村は、周囲と一線を画す落ち着いた環境である。そしてその中にあって、博物館-ホール・オブ・ホールズは、小さいながらも本格的な活動とサービスを行う注目すべき博物館なのだ。

報告では、高見沢氏に同館の主な活動と「課題・苦情」と「今後」を示していただいた（詳細は表-2）。年間20万人前後訪れる利用者のほとんどは、活動で最重視する自動演奏楽器のギャラリートークに、ほぼ満足されて帰るという。だから、「課題・苦情」や「今後」の展望は、「それでもなお…」という利用者の「希望と期待」である。高見沢氏以下、同館スタッフが、ソフトサービスに真摯に応えようと努力されていることが、報告からジワジワと伝わってきた。

参加者の自己紹介時の感想には、「日本に存在するのが難しいタイプの博物館だが、その理念といい意気込みといい、うれしくなるような博物館である。」「小人数で頑張っていてすばらしい。自分が勤務する博物館では今学校に対するプログラムをどうすればよいか悩んでいるので、学校団体の人数の多少に応じたやりくりをどうしているのかうかがいたい。」「ワークシートなどは聞くと音がでたり、テレフォンカードと組み合わせるなどすれば贈り物として売れ行きが伸びるのではないか。」「来館者といいかに接して運営を行っているか、もっと聞かせてほしい」…など、同館に対する好意と、自館での懸案となっている事への解決の糸口を見つけ出そうとする真剣なものが多かった。これらの感想を引き金に、プログラムは「質疑応答・討議」へと移った。

以下、その内、主なものを示そう。

Q-1 人材の確保はどうに行っているのか？

A-1 縁故や大学の紹介。会社の人事で配属は決まるが、重視されるのは、その熱意である。



Q-2 館員の教育や研修についてはどんな特徴があるか？

A-2 ギャラリートークのために、館員全員が、発音・发声の活舌訓練を行う。その解説には、館員が自ら修得した知識で対応している。職員のやる気や資質によりかかっているが、皆、向上心を持っている。来館者が多いときは、喫茶室の職員も回して解説に当たる。

Q-3 地域との関係については？

A-3 清里は入植者の街であり、地元出身オーナーの愛着はことさら強い。大変個性的な人物で、地域を思うあまり、地域の人と衝突することもある。本物の文化を地域に創りたいと真剣に考えている。日本とドイツの間で学生たちのホームステイを相互で行う事業もその現われで、博物館で、というより、「萌木の村」全体で地域に新たな文化創造の機会を与えていいるといえる。

Q-4 マルチメディアなどの展開が今後は重要だが、具体的に何か行っているか？

A-4 展示はコレクションの実物中心で、特にマルチメディアの手法は採っていないが、この7月1日よりインターネットのホームページを開設し、情報提供サービスをはじめた。コンサート予約、アンケートとミュージアム・グッズ等の通販を行う。これによって、お客様ともっと仲良くなれる方法を模索している。将来は、研究者への情報提供も行いたい。

Q-5 ミュージアム・ショップの状況は？

A-5 メインの商品はCD。ワークシートや書籍などは博物館の入口に、オルゴールなどのお土産的なものは別棟のショップで販売している。

…などであった。

民間で、小規模な博物館であるが、その本格的な活動に、参加者の多くが何らかの刺激を受けたようだ。日本の多くの博物館が、公立、またはその外郭の公益法人営という形態をとるが、こうした博物館のちょっとした工夫によって生まれる利用者への親近感の与え方など、同館の取り組みは、運営形態の壁を越えて、参加者たちの参考になるものであつたろうと、仕掛け人の幹事一同としては、うれしく思うのである。

最後に、部会長でいらっしゃる諸岡博雄先生が病後のご静養のため欠席されたことが最も残念であった。

一日も早いご回復、ご復帰をお祈りいたします。

（幹事・重盛恭一／（株）トータルメディア開発研究所）

## 表-1 プログラム進行とホール・オブ・ホールズの概要

### ■研究部会プログラム進行

- 1.大堀哲学会長あいさつ（諸岡博熊研究部会長ご欠席のため）
- 2.ホール・オブ・ホールズ 高見沢 清隆氏報告
- 3.参加者の自己紹介、感想
- 4.質疑応答・討議

### ■萌木の村博物館 ホール・オブ・ホールズ概要

#### ●主な活動

- ・アンティーク・オルゴールを含む自動演奏楽器と日本の伝統的な食器を収蔵・展示し、特に自動演奏楽器は、実際にその演奏を楽しんでいただくことを活動の中心としている。
- ・自動演奏楽器… 約250台収蔵（大部分が演奏可能）。
- ・伝統食器…… 安土桃山から昭和初期まで。江戸末期のものを中心に、約3000点所蔵。年2回テーマを替えて「日本の伝統食器展」を開催。

#### ●人員構成

- ・館長1、館長代行1、副館長1、学芸課長1、学芸員2、庶務（事務、喫茶、受付-解説員兼務）、パート（受付）1、ミュージアム・ショップ（別組織）3、オルガン工房-技師1、
- その他、繁忙期アルバイト若干名 <常勤11名、兼務2名>

#### ●交通

- ・八ヶ岳山麓JR清里駅から徒歩約10分、国道141号線沿い。

#### ●料金

- ・大人800円、小人500円（20名以上の団体は各100円割引）
- ※入館券は1日有効で、再入館が可能。

#### ●開館時間

- ・通常期 開館時間10:00 最終入館17:00 閉館18:00
  - ・夏期、GW 開館時間 9:00 最終入館18:00 閉館19:00
- ※年中無休

#### ●展示、ギャラリートーク以外の事業

- ◆アンティーク・オルガン・コンサート（予約制）
  - ◆特別コンサート「ミュージアムコンサート」（予約制）
  - ◆スクールプラン（完全予約制）
  - ◆大型自動演奏楽器の無料公開
  - ◆クリスマスパーティー「Xmas Special Concert」
  - ◆結婚式
  - ◆フィールドパレエ・コンサートへの参加
  - ◆地域イベントへの参加と自動演奏楽器の貸し出し
  - ◆オルゴール・自動演奏楽器の修理、修復サービス
  - ◆インターネットによる情報サービス＆通販
- <http://www.sannichi-ybs.co.jp/MOEGI/index.html>

## 表-2 各活動の現状・課題、そして展望

### ■定期演奏

#### 【内容】

- 学芸員、職員によるギャラリートークと資料の演奏

#### 【特色】

- 時間が決まっているだけで、解説者がその時の入館者の状況により演奏楽器を選ぶ（前の回と重ならないもの）。状況に応じ、ビデオカメラや解説にマイクロフォンを使う。

#### 【課題・苦情】

- 解説技術の向上。解説者の知識・認識の統一

#### ●利用者の声

- システムが良くわからない。次に何を演奏するかわからない。椅子がない。混んでいて見えない。うるさくて聞えない。子供が騒がしい。もっとたくさん聴きたい。せまい。

#### 【今後】

- ・解説手法の研究、職員間の知識の交換会を実施。
- ・ヴィジュアル機器やコンピュータ活用。演奏・解説以外の展示手法の多様化。
- ・解説者、職員の負担軽減・やる気の向上
- ・解説者、職員の教養・もてなし・笑顔の向上

### ■アンティーク・オルゴール・コンサート

#### 【内容】

- 閉館後、展示室に椅子をセットして行う自動演奏楽器によるコンサート。お茶の時間をはさんで2部制。中学

生以上が対象。

1部・2部で解説者が代る。他に喫茶担当の3名で対応。

- 毎週水・土曜日 20:00から1時間45分 料金3000円  
定員-50名

#### 【特色】

静かな環境の中で、ゆったりと腰掛けて聴く大人のコンサート。解説にはビデオ映像やカメラを使う。3ヶ月から1ヶ月ごとにプログラムを替え特集を組む。国毎の特色紹介、機種別、特定作曲者の特集、時代別、文学との関係、清里の自然の話し、星や季節、自動人形特集などさまざまなタイプがある。

#### 【課題・苦情】

- 解説技術の向上。解説者の知識・認識の統一。プログラムのマンネリ化。担当人員の確保。

#### ●利用者の声

ティータイムの椅子が足りない。混んでいて見えない。うるさくて聞えない。料金が高い。子供が騒がしい。もっとたくさん聴きたい。解説者はいらない。解説者の声が聞えない。好みの音楽が聴けなかつた。開始時間が遅い。

#### 【今後】

- ・プログラムの改善（より参加性を高めたり、音楽会的形式へ）
- ・特別展的な取り組み（自動演奏楽器とは直接関わらないテーマ）
- ・解説手法の研究、職員間の知識の交換会を実施。
- ・解説者、職員の負担軽減・やる気の向上
- ・解説者、職員の教養・もてなし・笑顔の向上

### ■特別コンサート

#### 【内容】

クラシック室内楽を中心とした音楽会。年に4～5回開催。大人対象。

また、子連れでも楽しめるファミリーコンサートも企画。クリスマスには3日間程度パーティ形式の「クリスマス特別コンサート」を行う（採算は度外視）。

年に4～5回開催 料金3500円

#### 【特色】

本格的な演奏会を低価格で提供。演奏者の理解と協力。演奏者と観客、博物館職員との緊密な関係を築くため「ミュージアムコンサート俱楽部」を運営。

#### 【課題・苦情】

- 客席数と地域性による最大収益の限界。演奏者への謝礼。演奏会のレベル維持。コンサート俱楽部の運営・管理。

#### ●利用者の声

開始時間が遅い。冬は車で行くのが恐い。価格が高い。後ろの席だと見えない。

#### 【今後】

- ・地元宿泊施設との連携の強化
- ・演奏者への謝礼の改善
- ・価格単価の引き上げ
- ・広報手法の改善
- ・ミュージアムコンサート俱楽部会員への手厚いサービス
- ・固定客の確保

### ■外部への展開

#### 【内容】

出張コンサート。資料の貸し出し（自動演奏楽器、日本の伝統食器）企画展／特別展の外部展開。イベントへの参加。地元地域への還元。

#### 【特色】

解説者つきの外部展開。外部に貸し出せるのは、博物館内に修復技術者がいることによる安心感があるため。パッケージ化した企画が組みやすい。

#### 【課題・苦情】

- 楽器の消耗／人員の不足／輸送コスト
- 資料管理体制の未確立／働きかけのノウハウ不足

#### 【今後】

- ・より積極的な外部展開

その他、ハード面等に対する課題・苦情が報告されました。割愛します。

## 投稿ご自由

### 侃々諤々

皆さんで考えるコーナーです。ご意見をお寄せ下さい。

### 日本ミュージアム・マネジメント学会発足に伴う 一つの提案と感想

新 和宏

日本ミュージアム・マネジメント学会発足おめでとうございます。当学会が今後大いに発展し、学会員の皆様の活発な研究活動の場となりますよう祈念いたします。さて、当学会発足に伴い、博物館に籍を置く一学芸員として、現状の国内博物館が抱えている諸問題に対する提案と学会誌創刊号に対する感想を記したいと思います。提案事項に対してはあまりかたくるしく構えず、学会員同士、侃々諤々する契機となれば幸いです。

#### 【問題提起】

#### 1 日本の博物館教育と博物館利用者の意識改革について

幾たびかの博物館ブームを経て、今や全国どこを訪れても何かしらの資料を列品した施設を見る事ができる。それらの中には正に列品（資料を陳列しているだけ）であり、ディスプレイ（列品とディスプレイの違いは後半で述べる）とはいえない施設も多くある。この博物館ブームや文化施設の充実といった周りからの強い要望で“おらが村にも資料館を”“博物館の一つでも無ければ文化的に遅れている”といった勝手な思いこみで安易にそういう施設を造ってしまう。名前こそ○○郷土資料館や○○博物館となっているが、大半の施設は地元の有形文化財を所狭しと並べている。そこには博物館の展示ポリシーも展示のストーリーもない。ただ、展示ケースやステージをうめているにすぎない。その資料が伝えたい情報を何一つ引き出そうとしていないのである。これはそこの学芸員の責任である。もちろん、問題はこれだけではない。オープンを間に合わせるために取り急ぎケースだけはうめてしまう。これで輝かしくオープンセレモニーに漕ぎつけるわけであるが、この段階の展示が向こう何年も続くのである。その後、博物館は特別展、企画展の企画に追われ、学芸員は多忙を極めるのである。

さらに、それ以上に責任があるのはその博物館を受け入れる利用者（見学者）である。自分たちが博物館に何を求め、何を学び、どういう情報を得たいのか、何も考えていない。常に自分たちを受け身と見立て、博物館が提供した情報に満足している。もう少し博物館の見方を勉強し、常に最新のデータや話題の資料を求める知的 requirement を忘れてはいけない。今の博物館見学者の見学方法、利用方法はただ単にその日の日程の一部でしかなく、目的意識を持って来館することはまず

ない。展示室を最初から終わりまで通して見ることによって理解したように錯覚する。実は沢山の資料を見せられ、何一つ記憶には残っていないのである。しかも一度見学しているから当分見学することはない。この悪循環がレベルの低い博物館利用者を生み出しているのである。この現状をどう見るか。我々博物館従事者が、さらには学芸員がその指導にあたらなければならないのである。博物館の見学方法、利用方法を指導することが見学者のレベルを向上させることになり、かつ学芸員も甘えさせない厳しい目を育てることになるのである。

#### 2 広報活動の現状と今後

博物館が展覧会や講演会を企画した場合、いかにして多くの来館を促すかが広報活動の論点となる。この広報活動も時代の推移と共に、従来のような博物館側の一方的な広報から利用者が積極的にアクセスする方法へと変わっている。従来、博物館側はポスター・リーフレットを配布し、テレビや書面などのメディアを利用するといった広報活動を行ってきた。この場合、利用者は何の苦労もなく一方的に情報を入手することが可能である。よって、利用者は自分の目的にあった情報を積極的にアクセスすることをしなくなる。これでは利用者の探求心や好奇心を刺激することは難しい。しかし、昨今のインターネットやパソコン通信、電話照会等は利用者自ら目的を持って興味ある対象へアクセスし、情報を得ることができる。この傾向が進めば利用者の要求自体も高度化し、それを満足させるために博物館側も相応の内容と対応を検討していかなければならなくなる。物質文明を極めようとしている現在、利用者の知的 requirement を満たす事業内容とその広報が問われる状況にある。

#### 【感想】

JMMA会報 No.1 (vol.1 no.1) 掲載の第1回大会特別講演「ミュージアムがつくる新しい文化」(環境プロデューサー 泉 真也)について感想を述べる。

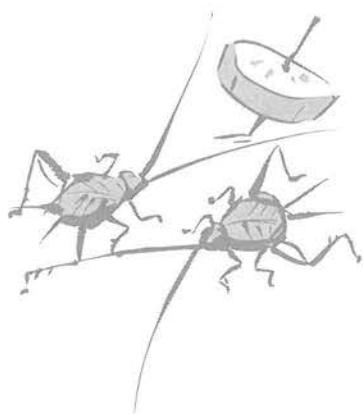
#### 博物館と博覧会の共通点と相違点

氏が論文中で、堺屋太一氏曰く「博物館というものは恒久施設で、博覧会は仮設だからまったく別のものだ」という指摘に所見を述べられているように、私もモノによって世界に触れ、世界を学ぶという点で博物館も博覧会も同じ性格をもつていると思う。ただし、同じモノを見せるにしても両者の間には根本的なコンセプトの違いがある。博覧会は当該時点での最高の技術、最新の製品、情報のみを提供すればその趣旨は満足する。このことは一過性の製品や作品等を列品（陳列）すればいい博覧会の場合は正にモノを列品すればいいが、博物館の場合は展示構成（ストーリー）、歴史的背景、時代的な比較、地域的な比較等に則した資料

をディスプレイしなければならない。さらに、見せ方についても列品（陳列）とディスプレイの違いがある。

博覧会の列品では表面的（外形的）な製品の美しさ、機能性、快適性等をモノとそれを効果的に表現することができるステージにより見せることができる。そこには製品の内面的な部分（内部構造・部品のことではない）を見ることはできないし、また、見せる必要もない。その製品が醸し出す雰囲気（この場合はその製品が使われるとき周りに与える影響のこと）を大事にすればいいのである。しかし、博物館の展示（ディスプレイ）では表面的な情報や雰囲気よりもむしろ、その資料が我々に語りかけている部分（生物ならば生存し、生活していた時期・場所等、歴史資料・民具であればそれらを使用していた時期・人等）を資料毎の独特な言葉を翻訳（解釈）しながらみせなければならぬ。わかりやすく例えると、ある生物が化石として発見された場合、その生物が生前どのように生活し、どういう状態で絶命し、その時何を考えていたかまでをその化石一つから読みとれるような展示をしなければならない。民具であれば、それを製作した人のこだわり、地域差、使用者の年齢（技術が未熟であるが故に本来では考えられない部分が磨耗していたり）、立場、癖までも読みとり表現する必要がある。物言わぬ資料ではあるが、独自の言葉で伝えようとしている情報を読みとれるかどうかが我々学芸員一人一人の能力であり役目でもある。そういう意味では博覧会の列品は比較的容易だが、博物館として資料をディスプレイすることは学芸員としての感性を必要とする。

このように、モノを通して情報を提供することは博物館の場合も展覧会の場合も変わらないが、そのモノをどこまで表現するかが異なると私は考える。上述の問題提起と併せて学会員の皆様のご意見を賜りたい。  
(しん・かずひろ／国立歴史民俗博物館展示課)



## 書評



倉本昌昭「科学技術振興と科学館のあり方」  
（「地方債月報」1996年6月号, pp.4-9）

近年問題とされている「理工離れ」への対策として青少年に科学技術への興味をもたせ科学技術へ関心を育む為に科学技術館や科学博物館を充実活用しようという機運が漸く高まってきた。

平成6年12月科学技術会議の第20号答申に基づいて政府は「科学技術系人材の確保に対する基本方針」を決定し、平成7年11月には科学技術基本法が公布施行され、本年7月には同法に基づく科学技術基本計画が策定された。その中において「魅力ある博物館、科学館等の整備、充実及び魅力あるプログラムの開発を通じて青少年の科学的な見方、考え方を育み、自然科学の理解の深化を図るとともに科学技術が社会の発展、経済の伸長に果たした重要な役割に関する理解の増進を図るとともに学芸員等の専門職員の資質の向上を図る」；「博物館、科学館等の間のネットワークの強化等を講ずるほかマルチメディア技術を活用し、博物館、科学館等の一層の情報化を推進する」等と述べている。

さらに、新技術事業団と日本科学技術情報センターが合併してこの秋（平成8年10月）発足する科学技術振興事業団は、その事業の一つとして新たに「科学技術理解増進事業としてバーチャル科学館開発、科学館の充実強化、青少年と研究者・技術者の橋渡し等の事業」を行うこととしている。

このように科学館をとりまいての科学技術の普及啓発事業が活性化する機運が高まっている。この時に当たり我が国よりも早く「理工離れ」問題が生じ、これと取り組んできた米国を中心に欧州等における科学館の活動状況をとらえ、我が国における科学館の動向及びそのあり方につき考察している小論説であるが、科学館関連の仕事をしておられる会員諸氏にご参考になればと紹介致します。

（くらもと・まさあき／(財)科学技術広報財団）

## 会員からのメッセージ

### 〈個人会員・学生会員〉

#### ◆柿崎 博孝 (玉川大学教育博物館)

分科会に参加して感じるのは、現在の博物館をめぐる問題点の多さである。それも根深いものが多く、一気に解決できるものはほとんどないというのが現状であろう。自分自身学芸員として博物館に勤め、大学の学芸員資格課程に関わる者としてさまざまな問題を抱えながら日々を送っている。よりよい博物館の思想や在り方、運営理念の基盤となるものが、博物館と利用者の双方向的なつながりを軸としたミュージアムマネジメントの視点からうまれることを期待したい。

#### ◆黒澤 弥悦 (牛の博物館)

昨年、岩手県の前沢町にオープンした「牛の博物館」です。牛の生物学と民俗学の分野から取り組んだ展示は、殆どが実物資料で構成されています。化石・骨格標本・胃のシリコン含浸標本、また国内外から収集した数々の民俗資料が露出展示になつていて、視覚の不自由な方々には、それらの資料に直接触れていただいている。特に材質や音色が国々によって異なる「牛鈴」に、人が集中している様です。誰にでも対応できるミュージアムづくりに、毎日が試行錯誤の繰り返しです。

#### ◆小松 隆宏 (放送大学学生)

欧米のミュージアムを見てきました。アメリカでの展示工夫とボランティアの活用は特に印象に残りました。またヨーロッパでは教育的展示について各国の文化にあわせて試行錯誤しているようでした。

日本は欧米と比べて文化・制度の違いが大きく、ミュージアム・マネジメントの研究・実施にも障害が多いと思います。しかしこの学会の活動によりさらにミュージアムが素晴らしいことを期待しています。よろしくお願ひいたします。

#### ◆嵯峨 創平

私は都市社会学や地域計画の方面から博物館のソフト分野に興味を持つてJMMAに参加させて頂いています。今夏、わがまち清瀬市郷土博物館開館10周年記念行事として「なんでも展」という展示公募が行われました。私達は都市農業を考える企画として「清瀬のやさいふしきふしき～大根編」を出展し、大根に関する展示と小冊子の製作、大根料理を体験するワークショップ、「大根街道」をたどるツアーを企画実施しました。市民が地域の博物館に関わる新しい形の試みでした。

#### ◆立松 由美子 (豊田町役場)

サッカーのジュビロ磐田の磐田市と浜松市に挟まれた天竜川流域の豊田町で、香りの博物館の整備が進行中です。平成9年3月の竣工、11月の開館に向けて、現

在その準備に追われている毎日ですが、JMMAでの事例研究と参加者の積極的な姿勢が魅力でこの会に参加させていただいています。これから開館に向か、ますます東奔西走することになりそうですが、机上の空論ではなく、実践の生の声がお届けできると思います。乞うご期待。

#### ◆野口 智子 ((有)天城猪苑)

静岡県伊豆半島、イノシシの産地天城湯ヶ島町にある「いのしし村」は、イノシシのショーやレースが売りものの観光施設です。昭和45年、地元の旅館5軒が地域の顔となる時間消費型施設を造ろうと、出資しあい出発しました。そして、平成6年にオープンしたのが「亥博物館・ぼあぼあ」です。

520平方メートルのミニミュージアムですが、「イノシシと人間のかかわり」をテーマに、常設展のほか、1～2ヶ月単位で企画展を開催しています。“遊びながら学ぶ”“参加性”に重点を置いた手法で、開館以来「わが家のイノシシ展」「みんなで描くイノシシピッギングアート」「みんなで創るイノシシ七夕」「参加できる富士巻狩展」などをやっています。

「たかがイノシシここまでやるか！」と来館者をうならせたい、と考える毎日。JMMAを通じての出会いが、大変参考になります。

#### ◆長谷川 順一 (川内市教育委員会)

薩摩（鹿児島）の川内（センダイ）市で有島兄弟（武郎・生馬・里見弾）を中心に郷土ゆかりの芸術家たちをテーマとしたミュージアムの企画を担当しております。文学（白権派）・絵画（生馬・山口長男）・書・映画（里見弾作・小津安二郎監督）と組合せたユニークなものにしたいと考えておりますが、中途半端なものになる危険も大。まだまだ情報不足です。先進各館の皆様の御意見・御指導をお願いいたします。

#### ◆藤岡 薫 (かはくミュージアムショップ)

国立科学博物館では9月7日（土）から11月24日（日）まで「ピテカントロプス展」が開催されます。この展覧会にあわせて、かはくMuseum Shopではインドネシアの代表的なクラフトを販売することになりました。インドネシアにはたくさんの工芸品がありますが、今回、現地ジャカルタに出かけて選んだ目玉商品が「ろうけつ染め」の布製品、黒たんなどの素材を使ったイルカ、クロコダイル・ツリーを使ったフルーツ・カービング、帆船模型などです。インドネシアの「ろうけつ染め」の衣料品はBatik（バティック）とよばれ、手描き、型押し、手描きと型押し、量産プリントものに分かれます。量産プリントは除外し、手作りの伝統的な味がある型押し、手描きなどのBatikをインドネシア国営工場ブルディカリから輸入いたしました。テーブル・クロス、ハンカチ、ナフキン、のれん、ディナ

ー・セットなど各種のサイズがあります。価格は値ごろでお得です。お出かけを！

#### ◆星野 守弘（高崎市教育委員会）

近代日本100年或いはバブル経済を契機に、全国各地で様々な博物館が建設され、今でも建設中或いは計画中の博物館はかなり多くあるようです。濫立と言つては言い過ぎかも知れませんが、これだけ多くの博物館が開館すると、一般の人々にとってはどこに行つても同じようなものが並べてあるだけと言つた印象を強く受けているようです。こうした声に応えるには、博物館の個性化・差別化を図る必要があります。ハード面では博物館と共に他の施設を併設すること、ソフト面では活動運営やネーミングに工夫をこらすこと等が考えられます。個性化・差別化の問題は、皆さんも頭を痛めていることとは思いますが、J M M A の場で、特にソフト面を中心として皆さんと共に考えて行ければと思っています。

#### ◆榎井 喜孝（ミュージアム工学研究所）

近年の博物館情報化の流れは、社会状況の変化と共に、博物館そのもののパラダイム変容をせまるものであると認識できます。組織や人材、博物館諸活動のあり方など、生涯学習時代に対応した新たなミュージアム・パラダイム構築の基に考えなければと思います。本学会の活動を通して、皆様と共に学んでゆきたいと思います。

なお、同様な視点でインターネットのホームページを開設しました。ご覧下さい。

(<http://www.metamedia.co.jp/MUSEION>)

#### ◆吉田 浩（C S P ジャパン（株））

宇宙・科学分野のコンサルタントとして海外の博物館を見て回る機会が多いのですが、スミソニアン航空宇宙博物館（N A S M）の保管施設（GARBAR FACILITY）をご存じでしょうか。一般の人にはあまり知られていませんが、ワシントンD C 中心部より車で50分程のところにあります。N A S Mは年間入場者数が850万人を超えるスミソニアン博物館群17館の中でも人気No. 1の施設ですが（2位は自然史博物館（580万人）、3位は歴史博物館（490万人））、保管庫のバックアップの数とその貴重性には驚かされます。私が行った際は、エノラ・ゲイ（原爆投下機）が出庫を待っているところでした。ここでは予約しておくと、カジュアルないでたちのおじいちゃん（多分退役軍人と思う）が目を輝かせながら案内してくれます。

一方、ワシントン州シアトルにはボーイング社の航空博物館があります。地元の中学生が思い思いの自由な服でクラシックコンサートを開いています。そのプロ顔負けの技量とともに、このようなイベントが開けるスペースが十分に確保されていることと、肩のこらない地元住民との運営の協力に一考させられた次第です。



#### 〈法人会員〉

##### ◆六花亭製菓（株）

##### 帯広市郊外 6万坪の柏林に

##### ミュージアムコンプレックスが誕生

さる8月8日、帯広市郊外中札内村にある約6万坪の柏林の中に相原求一朗美術館がオープンしました。当美術館には北海道の壮大な自然を描き続ける洋画家相原求一朗画伯（新制作協会会員）が大雪山旭岳、十勝岳など北海道の十名山を描いた大作10点とデッサンが展示されています。美術館の建物は1927年、帯広市内に札幌軟石を使って建てられた建物を解体し、移築・再生されたものです。当時は、銭湯として利用されていましたが、新たに美術館として生まれ変わりました。この建物の平面は、6Mグリッドで構成され、美術館として手頃な規模であり、また石造りの重厚さと気品を兼ね備え、あたかも美術館のために建てられたような建物です。

また当美術館と同時に同敷地内に「北の大地館」という木造の美術館もオープンしました。この美術館にも相原画伯の北海道の風景画が展示されており、以前「愛国駅から幸福駅へ」で有名になった旧国鉄広尾線の廃線の日を描いた「幸福駅二月一日」も展示されています。

この柏林の中には、既に山岳画家故坂本直行氏の作品を集めた美術館、「坂本直行記念館」が平成4年にオープンしており、この美術館では、時折クラシックコンサートも催され人気のスポットとなっています。また、柏林や麦畑を見渡しながら北海道十勝の食材を味わうことができるレストラン「ポロシリ」もあり、食事の後には、柏林の散策も楽しめます。

当美術館は、帯広空港から車で15分のところにあり、芸術の秋にむけて、ゆったりくつろげる感動ゾーンとして鑑賞をお奨めします。

（ミュージアムコーディネーター・飯田郷介）



相原求一郎美術館

## 研究部会の開催予定一覧

●現在予定が分かっているものだけを、日程順に掲載しています。他の研究部会については、追ってお知らせします。

研究部会	日 時	テマ	場 所
理論構築研究部会	10月5日(土) 14:00~	講演・実習会「非営利組織における自己診断法について」 (講師: 笹川財団プログラム・オフィサー田中弥生氏)	国立科学博物館
制度問題研究部会	10月12日(土) 14:00~17:00	報告とディスカッション「アメリカにおける博物館の歴史や制度について」(報告: 東京大学大学院 山本珠美さん)	国立科学博物館

◆当学会の会員であればどなたでも、すべての部会に参加することができます。参加費等は特に必要ありません。

◆参加を希望される方は、別添の事務連絡票又は電話にて、学会事務局までお申し込み下さい。

## INFORMATION

### ●出版のお知らせ

大堀哲ほか監修『ミュージアム・マネジメント: 博物館運営の方法と実践』(東京堂出版、編集協力: 日本ミュージアム・マネジメント学会)がいよいよ9月30日に刊行になります。当学会の会員の方は割引価格で購入できますので、別添のハガキにてご注文下さい。

### ●第2回大会の開催

平成9年3月8日(土)、9日(日)に、国立オリンピック記念青少年総合センター、学習院大学、パルテノン多摩など、いずれかを会場にして開催する予定で準備を進めているところです。詳細については、次号に掲載します。

### ●研究紀要の発行

第2回大会の開催に合わせて研究紀要を発行しますが、編集委員会では論文(400字詰め原稿用紙40枚以内)と実践報告(同20枚以内)を募集しています。会員の方はどなたでも投稿できますので、奮ってご応募下さい。  
\*投稿の申込みは10月31日まで、原稿の〆切は12月20日となっております。詳細については、別紙をご覧下さい。

### ●会員募集

現在300余件の会員登録がありますが、学会活動の一層の充実に向けてできるだけ多くの方々に参加いただきたく、会員の皆様にはいろいろな機会に当学会をご紹介下さいますようお願い申し上げます。平成7年度同様、推薦者は必要ありません。幅広い分野からの参加をお待ちしております。

### ●原稿募集

本誌は、会員の皆様がつくる会報です。個性的かつ独創的な原稿を事務局までお寄せ下さい。

侃々諤々: 3,600字以内

書評: 1,000字以内

会員からのメッセージ: 個人・学生: 200字程度

法人: 600字程度

表紙デザイン・ロゴ

その他、掲載したい原稿がありましたら、事務局までご相談下さい。

## 編集後記

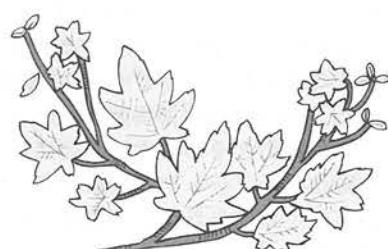
この夏、全国各地のミュージアムで「科学教室」や「ワークショップ」が多数実施されたことと思います。参加した人の多くはミュージアムに対してこれまでにない愛情をもってくれたことでしょう。

こういった事業を積み重ねていくことで、参加した人々とミュージアムの心の絆は強いものになり、ネットワークはひろがっていくはずです。

ところで、こうした事業を実施する際に大切なのは、何よりも利用者の気持ちになって考え、人ととのつながりを大切にすることではないでしょうか。

今回で2号になりますが、「書物について学ぶよりも、むしろ人間について学ぶことが必要である」というラ・ロッシュフローのことばを胸に秘めて、人に愛される会報づくりを心がけるよう努力していきたいと考えております。

(副会長、編集担当理事: 江ノ島水族館長 堀由紀子)



### JMMA会報 No.2 (vol.1 no.2)

発行日/1996年9月20日

発行/日本ミュージアム・マネジメント学会

事務局 国立科学博物館教育部企画課

〒110 東京都台東区上野公園7-20

TEL 03-5814-9876 FAX 03-5814-9898

デザイン・印刷・製本/(株)ミュゼ